





る内容を含んでいる。

②ロシア革命の教訓(一)……本シンジケートは、  
を共有してきたエスエル左派の放逐、党独裁  
の始まりと軌を一にした戦時共産主義の全内  
容を何干「正當でない(あるべきものところか)」  
ものとして従来のものを封鎖しようとして  
はなすまい。われわれの究極目標は世界革命  
の達成、数千倍の奇蹟な条件を想定し、克版  
の道を模索しなければならない(六)「理論的  
革命論」(七)「陣旗」(八)論文「ボカ党内闘争  
を禁止し、他党の活動を非法化したことか  
ら組織論上の危機」(九)「(十)内戦一革命戦  
争を闘争はくことは奪取した権利の定着から  
拡充に向けての最大の試練であり、他党放逐  
はその偉い根源性の表現である。すなわち  
革命の輸出入と統一軍形成(五)に対応して内  
的には戦時共産主義は地方ソビエトに対する  
中東ソビエトの、ソビエト中東に対する政府  
の放逐のより一尺の増大を要求し、党の野起  
の拠点となった。ペトログラーフに軍事委員は  
元その他として政府のなかで発展的徴収(来るべ  
き世界革命戦争)においてもそのための臨時軍  
命政府においてもそれを樹立するための野起  
においてそのわれわれは第一党をもってその  
ての活動を自己の下に集中し担いねばならぬ  
たろう) (iii) シンジケートに対する中央集約的  
管理、指導、計画化を達成するために技術專  
門家の大胆な登用、管理の単独責任制、差別  
賃銀(今日のわれわれの革命においてもそれは  
はより一尺不可避。ブルによる階級解体政策  
経営協議会方式(七)による。プロの階級分裂  
がそれを根拠づける。ロシアの反対者(左翼  
反共エスエル)を激せよは今日の新左翼内  
部の「労働者管理、工場占拠」派として未曾  
有の反発を惹起するかも知れない)。消費財生  
産部内としての中小企業の協同組合を通じた統  
合への道、糧食供給源としての農村と交換す  
べき商品の不足からの徴発方式(強行、軍需産  
品の生産下で農村に供給すべき商品を生産す  
る)の(中)工業が被弾、元の復活のため  
には一定の食料、原料を農村から都市に  
徴発せねばならぬという(農倫環(今日では根  
本企業による系列化と自給、整理により奇型  
化しなから残存している)からくる矛盾。

また後述(四)軍事革命政府の民生安定策(兵糧  
と勢力確保)に一体化した(四)再編、整理  
統合が遂げられたのに対し、時方の(四)隊の内  
心要。外口ブル、残存革命分子と結びつ  
き反動の温床となることに対する強い心要。  
(以上列挙してきたような多大の困難をのり  
こえるためにロシアでボリシェヴィキの依拠し  
たプロの組織性規程性、英雄主義、平等主義  
(一定の「出来高払制」とともに導入された  
「労作義務制」(一)「国家農業、大農場(七)へ  
の労作者の供給)「労作日近長。共産主義土旺  
部作。空襲隊運動。食糧と結合し、宣伝、組  
織をも行いつつ「富農」ら徴発を敢行する都  
市プロレタリアの「戦の部隊」。林業鉱山業  
をも含むあらゆる種類の重労作人の赤軍の労  
作軍としての従事。インフレによる現物生活  
への復帰(「専横上任意徴収」にかわるものとし  
て)食糧供給、無料共同食堂、郵便、電信電  
話、水道、光熱費等の支払廃止、家賃凍結な  
どの悲憤介配形態をもってする「穴え下の「強  
い内水平等主義」)。

(V) 戦時共産主義における内容(特に(四)を直  
接、社会主義、共産主義を導入(一)「部分的に  
全面的にははともかく)するものとして総括  
してはならない(「アハリント過渡期経済論  
」、「トロツキー「テロリズムと共産主義」を  
この誤まり)。えうではなく、(四)内戦一  
革命戦争下でホに指導されたプロの發揮しえ  
た英雄主義として(一)「過剰労作者の任力  
と極端な出来高払制のニンジン(吊り下げら  
れて行われたスカーフ主義(七)というスカーフ下  
の「社会主義競争」の生産力(七)と区別せよ  
し、これが(一)と(七)を支えたこと。(VI)しかしな  
から、世界プロ独ならぬ後述ロシア、ソビエ  
ト共和国の(四)における都市一農村、また、  
ロシアと連合、同盟、連邦、合邦したよりい  
さい民族ソビエト共和国とロシアと生産力格  
差からくる上述の農倫環は単一党独裁の下に  
おける中央集約強化によっても、軍事(経済  
的同盟強化)によっても基本的には解決するこ  
とができず、(四)内戦の終了とともに、自軍か  
ら土地を徴収せよともよくなることを契機に  
一党に徴発(何干万の徴収した戦時部長員が



融合、改良党、地方自治会等とてこがえりま  
レデーになつた所も(田部軍を離脱して)つ  
危きの欺不さと一九の五年のようは予行演説  
の如也) (iii)アルはハブル、リンゴロの改革  
命軍の軍隊を建設 (iv)広汎な之衆の決起(も  
かかぬら有権者多数の一点に集中しえず、(iii)  
の相対的力の軍隊により増減せられる (v)  
以上は、「選きたる命軍、早きやを起しや  
ゴミシカ条」に在りて思案「あるいは国民が  
強かつた(仙)では統括しきれない。党員の軍、  
直轄細胞をもちかつ新口主を内と外から一  
歩に する更体的第一化をわかつた世  
界党建設の如としてのみ統括しうる。(vi)革  
命の封殺としてのワイマール(ゲルサイユ)  
体制下の相対的安定↑英と中口の閉鎖の強  
立化、紛争に代して(vii)KPD成員、補給  
的安定期は種々の者、恐慌右突業者、青年  
軍、赤色戦隊(党派軍団)或(軍隊)党打退と  
無関係(外)にA.Z.E.S.成員、安定期は手工業  
者、農民、恐慌期は農民、都市中産層、S.A  
(労働者打退)、S.S(親征隊)により上から  
統制/徳帝の世界市場における特殊性も及し  
、また、軍部、官僚層の支配権は既にたゞ  
れつつも戦争開始のすゝと茶にまずN.A.Z.  
Sによる赤色戦線の増減がなされ、これを販  
上げながらねり再編完遂。K.P.D.が併呑を  
ほとんど新たに組織しえなかつたこと(トロ  
ツキーの「社会リズム論批判」に「社会統一  
戦線」ソビエトの全くの誤り)。

④ 中国革命の教訓 (特に軍政革命との対比を)

- (i) 都市革命の財北プロの解体の上に毛路線  
成立(農村根拠地)との意義と限界
- (ii) スタリフハ路線との対比(対比の中で毛  
路線形成(四民プロクク批判、陳地戦ソビ  
エト論批判))
- (iii) 三結合の意義と限界(党と軍の関係、うち  
かられるべき権利)

⑤ 戦後戦論

- (i) 三本相儀八環 注意(小所有者にパンのイデオ  
ロギーを止近代プロの組織性、規律性)
- (ii) 東欧は千トのみ して正規軍と戦争  
ス々は広汎なバル干ガン抵抗斗争の力を利用  
し 的分割協定を行い、ソ連軍を皆殺とし  
た東欧の無血革命

⑥ 今日の「日独」を論ずる革命「の批判」

⑦ 世界革命戦争の今日的課題……略

- ① 世界プロ独相領
- ② 相領一わたり奪取



